

# 中学生の意見文を成立させる条件に関する研究 —「京都府教育委員会小論文グランプリ」入賞作品の 「首尾」の検討を通して—

植山 俊宏・小野田 磨柚\*

## Research on the Conditions for Establishing Opinion and Editorial Texts of Junior High School Students: Through Examination of the “Conclusion” of the Winning Works of the “Kyoto Prefectural Board of Education Essay Grand Prix”

Toshihiro UYAMA and Mayu ONODA

*Accepted November 2, 2021*

**抄録：**意見文における「首尾の呼応」は重要な条件であることは見出されているが、その指導方法は、その効果も含めて明確にはなっていない。本研究では、意見文が文章表現学習の主要な位置を占める中学校段階において、「首尾の呼応」がどのように現れているかの実証的な検討を通して、その指導の成果と問題点、及び研究の成果と問題点を明らかにしたものである。まず、ここ 30 年間の「意見文」に関する理論面の記述の検討を行い、その整備の実状をとらえた。ついで、京都府教育委員会が実施している「小論文グランプリ」コンクールの上位入賞作品 36 編の「首尾の呼応」を分析した。両方の結果を合わせて、実践面、理論面共に「首尾の呼応」に関する考究は不十分であることを見出し、研究の成果とした。

**索引語：**中学生意見文, 首尾の呼応, 問題解決, 問いと答え, 小論文グランプリ

**Abstract:** It has been found that “successful response” in the statement of opinion is an important condition, but the teaching method, including its effect, has not been clarified. In this study, we clarified the results and problems related to guidance and research through empirical examination of how “successful response” appears in the junior high school stage where opinion sentences occupy a major position in sentence expression learning. First, we examined the theoretical description of the “statement of opinion” over the last 30 years and how it is maintained. Then, we analyzed the “successful response” of the 36 top prize-winning works in the “Essay Grand Prix” contest held by the Kyoto Prefectural Board of Education. By combining both results, we found that the study on “successful response” was insufficient from both practical and theoretical aspects and used it as the result of the research.

---

\* 井手町立泉ヶ丘中学校

**Key Words:** junior high school opinion, successful response, problem solving, questions and answers, essay grand prix

## 1. 問題の背景

### (1) 「意見文」の名称及び国語教育における略史

一般的に中学校、高等学校で主流となっている意見文の学習については、表現の分野と理解の分野があるが、表現の分野の特別な呼称として、「小論文」という名称がある。これは、学習の実態に即した名称というより、小論文のコンクールや、受験における小論文など、いわば社会的な制度として認知された名称といえる。ここでは、「小論文」という名称をコンクール名などの限定された箇所のみ用い、全体としては、「意見文」の名称を用いることにする。

意見文は、古くは、「議論文」と呼ばれ、中等国語科教育の学習内容として位置づけられ、明治時代までさかのぼることができる。しかしながら、戦前の義務教育段階の小学校では、文章表現教育が、「綴方」と呼ばれたように、「綴る」ことが主流で「論じる」「議論文」は義務教育上の位置づけはほとんどなされていなかった。意見文作成が文章表現学習の一角を占めるようになるのは戦後であり、それも大学や高等学校の入学試験の出題内容となってきた 1990 年以降といえる。だが、この画期に関することは、ここでは検討の対象としない。なお、この方面の研究に関しては、大西道雄の著作があり、一定の集大成がなされている。

平成元年告示の学習指導要領では、作文の授業時間数が明示され、国語科教育上での悉皆的な取り組みがなされるようになった。しかも「指導計画の作成と内容の取扱い」において「論理的な表現の基礎的な能力を高めるようにすること」が明記された。この制度面での整備が意見文作成学習を本格化させ、促進させたとみることは妥当だと考えられる。

### (2) 研究の目的—「意見文」の「結論」(首尾)を考察する意義—

ここ 30 年間ににおける「意見文」作成学習は学習指導要領の追い風も相俟って、いわゆる右肩上がりの傾向を示しているが、それは主に量の面、つまり書くことの授業時間数や書く回数に反映されており、質的な面の保証が十分になされていないと見受けられる。

生活文のように「所感」を表現する文章とは異なり、「論理的な表現」が要求される意見文では、起承転結という語が広く用いられているように、文章の結構(組み立て)が求められる。その実践上の一つの成果としては、問題設定の定着があげられる。首尾でいえば「首」である。問題発見、問題抽出、問題設定のように論題を提示してから論じ始める方法はほぼ定着が見られる。だが、それに比して、問題解決の部分、結論部分のあり方は、十分な成果が上がっているとは言いきれない。首尾の呼応が不整合であったり、乱れていたり、生活文のような「所感」で終わったりしている例が多くみられる。

この「結論」部分の思考方法、論述方法については、表現者の思考力、表現力の高低が大きく作用することは間違いないが、一方で指導者側の「結論」に関する認識や方法論の不十分なあり方も作用していることが推測できる。一例を挙げると、意見文の結論を読者に対する行動や意識の要求で締めればいいのか、読者に対する意見や見解の表明で終わればいいのかといっ

た「終わり方」の指導が十分ではないのである。

近年、「結論」に代わる用語として「主張」という語が用いられるようになってきている。だが、この「主張」は生活語彙とは異なる意味で用いられている。上記の「要求」も「表明」もこの中に含まれていることがほとんどである。とすると、学習者の実体と離れた「業界用語」的な使用法に陥っている可能性も考えられる。

本研究では、中学生の「小論文」作品（コンクール入賞作品）の検討を中心にこの「結論」（首尾の呼応）の問題を考究することとする。

### (3)研究の手順・方法

研究の手順・方法として、次の方法を採用。

まず、1980年前後から現在までの「意見文」の定義について概観し、その概念の変遷をとらえる。特に「結論」に当たる部分の機能、位置づけを検討する。理論面の変化を追うことを目的とする。

ついで、京都府教育委員会が実施している「小論文グランプリ」上位入賞作品の首尾の呼応、結論のあり方の検討を行い、意見文作成学習の現状を把握し、分析する。対象は、第6回から第8回の最優秀作品9編、優秀作品27編の計36編とする。実践面、学習面を今日的な視点からとらえることになる。

最終的に、今後の意見文作成学習の「結論」指導の基礎及び指針となる成果をまとめる。

## 2. 1980年前後から現在までの「意見文」の定義の概観

### (1)概観の意味

上述のように、平成元年学習指導要領告示を契機に「意見文」作成学習が本格化したと目される。正確に言えば、小学校高学年から中学校にかけての5年間は義務教育段階における社会的重要性の認識のもとに重点化させたとみることができる。ここでは、中学校段階に絞って検討を行う。なお、当然のことながら、高等学校の意見文作成も同様に社会的重要性を有しており、中学校から高等学校へかけての連続性でこの領域の理論構築が行われてきた。定義については、中学校と高等学校を区別せずに扱うことにする。以下、下線は引用者による。

### (2) 1980年代～1990年代

#### 1) 森田信義（1981）

自己の見解を表明して、相手を説得することを目的とする文章である。説明文が「それは何であるのか」に答える文章であったのに対して、意見文は「どのようにすべきであるか」について論理的に述べた文章であると言うこともできる。

端的な定義であり、明快だが、学習指導上の必然性を反映したものではない。とはいえ、「自己の見解」と「相手を説得する」という基本的な二本の柱がこの段階で打ち出されている。

#### 2) 藤井治（1984）

感想とは、直接的な体験や、見聞・読書などの間接的な体験について、自分の心の中に感

じ取ったことを文章に書くことである。これに対して、意見は、そうした経験にかかわる事柄や問題に対して自分の考え（意見）を書くことである。もう少し端的に定義するならば、感想は「所感」であるのに対して、意見は「所見」であるということができよう。

感想と意見の対比という構造からの記述である。あくまで「経験にかかわる事柄や問題」をベースにしており、そこから導かれる「自分の考え（意見）」とし、「所見」との呼称も可能とする。

### 3) 巳野欣一（1988）

定義 何かの問題について、自分の考えを理由や根拠をふまえ、筋道立てて述べた文章をいう。

意見文の特質 意見を述べる目的は、相手に対し、自分の主張を根拠に基づいて論理的な構成で訴えることにある。したがって、意見文を読んだ相手が、書き手の主張を理解納得し、共感したり、時には今までの自分の考えを変えたり、訴えに応じた行動を起こしたりするという反応を示すことによって目的は達成されたことになる。

意見文には、根拠、主張、論理が必要なこと、その結果として、読者の納得、共感、あるいは考えの変更、行動の開始等があることを示している。必要な要素自体はほぼ出そろっている。

定義 意見文は、主体と対象との鋭い緊張関係、そのままでは安定しないという対立的状況に直面して、別な見解を持つ可能性の大きい他者を明確に意識して、論理的なすじみちをたどって、納得せざるを得ない形で自分の主張をうなずいてもらおうとして書いた文章である。{中略}

(2)目的・相手意識 {中略} 意見文は、解決型意見にしても、思索型意見にしても、別な見解を持つ可能性の大きい他者を明確に意識して、何としても自分の主張することにうなずいてもらおうとする。

(3)表出の仕方 {中略} 意見文はあくまで論理的姿勢を崩さないで立論を展開し、知的に納得し得る結論を導いていこうとする。

ここでは、大西の論に拠りつつ、意見文指導の全体像を集約している。

### 4) 大西道雄（1989）

意見には、感想型意見、思索型意見、解決型意見の三類型が措定される。

感想型意見は、いわゆる読書感想文といわれるジャンルの中学的な内容をなすものと考えてよい。{中略}

思索型意見は、内的問題・障害の解決に、主体の意識が向かうところに生み出されるものである。{中略}

解決型意見は、主体が問題や障害のある事態に直面した際に、その問題事象を客観的に把握し、その生起する原因を追求し、解決策を講じる、その一連の思考過程と思考結果を意見内容とするものである。

大西は、意見の内実に分け入って、主に意見文としては三大別できることを示し、またその目的も明確にした。

### 5) 大西道雄（1997）

意見には、感想型意見、思索型意見、解決型意見の三類型が措定される。

感想型意見は、いわゆる読書感想文といわれるジャンルの中学的な内容をなすものと考えてよい。一般に、意見と感想とは別次元のものであるとされる。{中略}

思索型意見は、内的問題・障害の解決に、主体の意識が向かうところに生み出されるものである。言うまでもなく、主体が、問題（対立）の発見をしたときには、ある種の感動がそれともなうて生起しており、それが主体の追究のエネルギーとなっているのである。{中略} 思索型の場合は、「行動」は外に向かわず、内に向き、精神的（あるいは思想的）安定をもたらすのである。{中略}

解決型意見は、主体が問題や障害のある事態に直面した際に、その問題事象を客観的に把握し、その生起する原因を追求し、解決策を講じる、その一連の思考過程と思考結果を意見内容とするものである。この意見は、現実的な適用活動を前提として形成される点に特色がある。つまり、思索型意見が、主体の内面に向けて形成されるのとは対照的である。

大西は前著による定義は修正していないが、感想型意見が意見文とは別次元になること、思索型意見と解決型意見がそれぞれ主体の内向きと外向きであることを明確にした。また思索型意見が精神的安定のため、解決型意見が現実的な適用活動と結びつくためにあることも明らかにした。

### (3) 2000 年以降

#### 6) 森田信義 (2009)

このジャンル（※引用者：「説明・評論等」）の特徴は、認識主体、表現主体が、自らとらえ、創造したものをもとに、読み手を「説得する」目的で書いた文章であるという点にある。説明文に比して、表現する生徒の個人的、個性的な立場が、色濃く表れたものととらえておく。両者の違いを、「解明」の文章と「主張・説得」の文章とすることも可能であろう。意見文と論説文、評論文の違いは、その対象とする事象の内容特性や構造の難易や、認識や表現形式の完成度、読み手の要求水準の相違などに求めることもできるであろう。

森田の記述は、「主張・説得」に踏み込んだものとなっている。「このジャンル」には、意見文が含まれるが、「表現する生徒の個人的、個性的な立場が、色濃く表れたもの」という指摘は意見文の実際を反映しているといえる。

#### 7) 中西淳 (2010)

意見とは、「主体が、問題・障害のある状況、事態に遭遇し、それを解決、克服するにあたって、判断・行動の基準・根拠とするために形成した理念」のことである。通常、「人は、日常生活の中では、自分を取り巻く状況、事態と調和的に存在し、その存続状態は安定して」おり、その状況や事態に障害や問題を感じた場合、それを解決したり除去したりしようと、他者（場合によっては自己）に対して自らの考えを示す。その考えを文章の形に表現したのが意見文である。その目的は、読み手を納得させ、または共感させ、障害や問題の解決を図っていくところにある。それゆえに、意見文には、他の文種に比べて、読み手を導くための確かな論理がより強く求められる。

中西の記述は、基本的に大西の論に拠っているが、他者（読者）の位置、機能についてより詳細に触れている。だが、「主張」という強い姿勢は見られない。

#### 8) 大西道雄 (2018)

意見文とは、ある物事や事態・見解などについての考えを、根拠を明確にして、論理的に述べ表した文章を言う。{中略}

### 意見文の種類

意見の内実によって、意見文は大きく次の類型に分けられる。

#### (1)問題解決型意見文

#### (2)意義思索型意見文

(1)は、ある事態に矛盾や葛藤、問題を発見し、その原因を究明し、解決のための方策を創出し、提案するという内容をもつ。それに対して、(2)は、ある物事や事態・見解に疑問や矛盾を見だし、それを解明して、答えとしての意義や価値を述べるというものである。

大西は、ここで感想型意見文は意見文のジャンルから外している。またこれまでより一歩進めて問題解決型意見文の目的に「提案」の機能を持たせたこと、思索型意見文を意義思索型意見文と修正して、「疑問や矛盾」の解明、そこから「意義や価値を述べる」ことを追加している。

#### 9) 佐渡島紗織 (2019)

誰かを説得しようとする文章…

読み手の考えが書き手と同じ考えに変わるようにする。

意見文、論説文、推薦状、自己推薦書、商品宣伝など。{中略}

<説得しようとする>文章には、明確な主張と強い理由が必要である。{中略}

文章構成も、{中略} <説得しようとする>目的なら、「主張—論拠」をセットにして構成するだろう。

佐渡島は、「実用文・論説文」というジャンル意識を持ち、その論説文の中に「意見文」を組み込む。簡略な記述だが、ここで「説得」の目的のために「主張—論証」が用いられるとする。ここで主張と論証とが両方とも同じ次元で用いられることになった。

### (4)総括

基本的には、思索型意見文と解決型意見文とに分ける大西の論を基軸にして、後続の論が組み立てられているが、それに少しずつ、「主張」、「説得」、「根拠」、「論証」などの新たな概念が盛り込まれ、変容していることが見て取れる。別の視点から言うと、最初は意見をいかに書き表すかに焦点が当てられていたが、次第に意見によっていかに他者（読者）を変容・行動させるかという他者への効果へと重点が移っていったということもできる。最終的に「主張」には「論証」が必要という提起が行われるまでに至っている。とはいうものも、意見文について下位分類的なジャンル設定までは進んだものの、それぞれに必要な要素相互の関係、文章全体の展開・構造までは十分に踏み込むまでには至っていないと見受けられる。

## 3. 中学生意見文作品の検討

### (1)概要

本章より、京都府教育委員会が実施している「小論文グランプリ」上位入賞作品を対象として、「首尾の呼応」、「結論のあり方」を検討し、意見文作成学習の現状を把握し、分析を進める。

具体的には、最新の3年分（『第6回』から『第8回』までの三回分）から、最優秀作品3作品および優秀作品9作品の計36作の生徒作品を取り扱うこととする。

加えて、対象作品の分析は「問題設定」(首)・「主張部分」(尾)・「首尾の呼応」(問いと答えの整合性の判定)の3点を項目立てて行うこととする。特に、「問題設定」では生徒作品の冒頭部分を、「主張部分」では結末部分を引用する。さらに、「首尾の呼応」では、「合」あるいは「不合」と表記し、分析内容を記す。

判定基準については、冒頭で設定した「問題」に対する「答え」として十分合致し、「説明・解決」されている場合は「合」とする。また、「問題」に対する「答え」として不十分で、読者への「要求・命令」や自己の今後の言動の「表明」にのみ終始している場合は「不合」とする。

なお、本章における分析は、上記の3項目に焦点化して行うものであり、生徒個人の作品内容の良し悪しを問うものではない。

## (2)中学生意見文作品の検討Ⅰ —第6回小論文グランプリ入賞作品集—京都府教育委員会(2019)

### 1) 最優秀『想像の翼を広げる』

- ・問題設定「室町時代に成立した連歌をもとに、江戸時代に活躍した松尾芭蕉によって芸術へと高められた俳諧。やがて明治時代に「俳句」として定着した五七五のリズムが奏でる十七音の世界。このわずか十七音で表現する俳句が、なぜこれほどまでに私たち日本人の心に響き今なお創作されるのだろうか。」
- ・主張部分「四季折々の言葉を使い、十七音で表現する俳句の世界。私自身が、表現したいものに出会ったとき、どんな言葉を選び、どう表現できるだろうか。五七五の十七音、とても短く、しかし奥の深いこの世界の入り口に立っている今、言葉との出会いを大切にしたいと改めて感じている。」
- ・首尾の呼応「不合」→問題設定では、「俳句がなぜこれほどまでに私たち日本人の心に響き今なお創作されるのだろうか」となるが、末文には「言葉との出会いを大切にしたいと改めて感じている。」とあり、自身の今後の行為を表明して収束している。問題設定の俳句が「創作され」続ける理由については触れておきたい。

### 2) 最優秀『主役を創り出す必須条件』

- ・問題設定「前菜、前座……。他にも色々「前」のつく言葉がある。おそらく主役を引き立たせるためだろうと考えられる。だが、僕は時々思う。サブ要素は不要で、みんなが求める主役さえいればいいのではないのだろうか。」
- ・主張部分「客観的に見たら、サブと思われるものが多いが、それを行う本人の立場からするとメインの仕事を全うしている。結局、サブ要素とは、物事を成り立たせるための必須条件なのだ。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「サブ要素は不要で、みんなが求める主役さえいればいいのではないのか」と問いかけつつ、「サブ要素」の重要性について述べる。そして最終、主張部分にて「物事を成り立たせるための必須条件」と明言し、呼応させている。

### 3) 最優秀『日本の文化と人間性』

- ・問題設定「先日、サッカーのワールドカップで、日本の観客の礼儀正しさ、マナーの良さなど、日本人の人間性が高く評価されていることを知った。外国と日本では、どのような人間性の違いがあるのだろうか。」
- ・主張部分「私たち日本人は、独特の思想や地形から生まれた「相手を立てる」文化を誇りに

思いつつ、外国の文化のすばらしさも学ぶ必要があると考える。」

- ・首尾の呼応「不合」→全体では、本論における論述の妙ゆえに見えにくくなっているが、首尾の呼応のみを対象とすると、問題設定で「人間性の違い」はどのようなものかという解明を行う旨の宣言をしながら、主張部分では「人間性（人間特有の性質）」から「文化」の違いにすり替えられている。この程度であれば小さな違和感で済むが、末文は「外国の文化のすばらしさも学ぶ必要があると考える」と結論づけられ、学びの必要性の再認識に繋がって終わる。

#### 4) 優秀『読書感想文の意義について』

- ・問題設定「読書感想文と聞いて、皆さんは何を考えるだろうか。作文を書くのが好きな人、得意な人も中にはいるかもしれないが、この課題に頭を抱えた経験のある人も少なからずいるだろう。他の課題と比べ、比較的時間のかかる課題だ。では、読書感想文を書く、ということに一体何の意味があるのだろうか。」
- ・主張部分「読書感想文とは文章を書く力をつけ、自己表現の手段を広げるための一教材だ。{中略} やらないまま大人になり、将来苦勞するのは自分自身だ。本来、こうして練習の場が与えられるということはとても有難いことなのだ。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「読書感想文を書く、ということに一体何の意味がある」のかを問い、主張部分では「読書感想文とは文章を書く力をつけ、自己表現の手段を広げるための一教材だ」と見立て、積極的な価値づけを行おうとしている。

#### 5) 優秀『数学から学ぶプロセスの重要性』

- ・問題設定「私たち中学生が、日々学習している数学。しかし、社会に出た時数学が必要とされる場面はほんの僅かだろう。{中略} 果たして、数学を学ぶことには、私たちにどんな利益やおもしろさを与えてくれるのだろうか。」
- ・主張部分「数学の面白さは、解が一つであってもプロセスが無数にあるという点だ。{中略} 新たな解を導き出すためにも学びの中で様々なプロセスを探し出すことは、新たな未来を創ることに繋がるに違いない。」
- ・首尾の呼応「合」→重要な要素を簡潔にまとめている。問題設定では数学を学ぶことで「どんな利益やおもしろさ」があるかを問いかけ、その解明として、主張部分で「数学の面白さ」に触れ、そこから将来に役立つものとして価値づけ、「利益」を示している。

#### 6) 優秀『同じ悲しみを繰り返さないために』

- ・問題設定「「戦争」。小学校でも中学校でも社会科で習ってきた。しかし、授業の中だけで本当に戦争を理解できるのだろうか、そう思う出来事があった。」
- ・主張部分「戦争経験者の高齢化が進む今、当時の経験を実際に聞くことができるのは、私たちの世代が最後となりつつある。それは戦争を客観的に、人によってはゲームの画面のようにしか捉えられなくなるかもしれないということだ。同じ悲しみを、二度と繰り返さないために、私たちの責務は何なのかを、繰り返し考えていくことが大切である。」
- ・首尾の呼応「不合」→表現は巧みであるが、首尾だけ取り上げると、問題設定で「授業の中だけで本当に戦争を理解できるのだろうか」という問いかけに対しての答えが、「同じ悲しみを繰り返さないため」の手法にすり替わっている。結末に「授業の中で理解できるか否か」の答えを明示する必要がある。

## 7) 優秀『e スポーツはスポーツか』

- ・問題設定「みなさんは「e スポーツ」という言葉をご存じだろうか。e スポーツとは、エレクトロニック・スポーツの略称で、対戦型ゲームなどを使って行う競技のことだ。{中略}ではなぜ、e スポーツは今、広がりを見せているのだろうか」
- ・主張部分「年齢、性別、生まれつきの体格差など、素因が関係なく、誰でも努力次第で上を目指すことができ、結果もついてくる、このような長所を持つe スポーツ。まだまだ未開発だが、人々が同じe スポーツという方向を向くことによって一体感が生まれる。{中略}このようにして、e スポーツは広がりを見せているのだ。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「なぜ、e スポーツは今、広がりを見せているのだろうか」と問いかけ、その答えとして「e スポーツの長所」を述べて、まとめている。シンプルな形だが、呼応している。

## 8) 優秀『一夜漬けは本当に効率が良いのか』

- ・問題設定「短期間で多くのことを詰め込む。私はその暗記方法は効率が良いと思っていた。{中略}しかし、一夜漬けで覚える方法は覚えたことを長期間維持できず、もう一度復習し直す必要があったのだ。なぜその方法では知識を定着させることができなかったのだろうか。」
- ・主張部分「取り込んだものをゆっくりと咀嚼をすることで初めて自分の知識として定着するため、それを怠ってはならないのだ。{中略}一回一回の勉強も意味があるものなのか、知識が一時的なものになっていないか、自分の勉強方法をもう一度見直していきたい。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では、「一夜漬け」に対する自分の考えを述べ、「なぜその方法では知識を定着させることができなかったのだろうか」と問う。主張部分では、「咀嚼」という比喻を用いて論証を行い、最終的には自分の勉強方法を見直していきたいと表明する。主張として弱いが、前述に問いと答えの呼応がある。

## 9) 優秀『後世への遺産』

- ・問題設定「和食は日本独自の食文化である。二〇一三年にユネスコの無形文化遺産に登録されたこともあり、今、和食は世界でも注目をあびている。しかし、和食は無形文化遺産、つまり誰かが伝えていかないとなくなってしまうものだ。このすばらしい食文化を後世に残していくために、私たちがすべきことを和食の魅力を探りながら考えてみたいと思う。」
- ・主張部分「お店で食べているよそいきの『和食』だけではなく私たちの健康を支える日々の『和食』のよさもアピールできたら、和食は後世への遺産として受け継がれていくと思う。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では、和食を「後世に残していくために、私たちがすべきことを和食の魅力を探りながら考えてみたい」とし、論に進んでいる。主張部分では、「後世へ受け継ぐ」ために和食の「よさのアピール」を具体的な手段として、問いに対する答えを示している。

## 10) 優秀『バリアフリーの社会』

- ・問題設定「体の不自由な人のサポートになるはずのものが、健常人間の心ない行動によって、障害物へと変わってしまっているのだ。このような現状があるのは、体の不自由な人にとってバリアフリーがどれほど大切なものであるかを、心の深い所で認識していないからだ、私は思う。」
- ・主張部分「お互いを思いやり、よさを認め合い、応援し合って初めて、本当のバリアフリー

の社会が生まれる。そのサポートがどれほど必要なものであるかを理解し、誰もが安心して暮らし、ともに楽しむことのできる社会を、みんなで築いていきたい。」

- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「体の不自由な人のサポートになるはずのものが、健全な人間の心ない行動によって、障害物へと変わってしまっている」ことを提示する。明瞭な問題解明にまでは至らなかったが、主張部分では「お互いを思いやり、よさを認め合い、応援し合って初めて、本当のバリアフリーの社会が生まれる」としたが、「サポートがどれほど必要なものであるかを理解」することを促し、末文は、「築いていきたい」と読み手の参加の要請を行っている。

#### 11) 優秀『言葉と文字の可能性』

- ・問題設定「会話なら表情や声の調子などで、相手の思いを理解することもできる。しかし、そのものの感情がない「文字」で、なぜ、こんなにも心が動くのか、不思議に思った。」
- ・主張部分「すべては「想像力」だ。「文字」の羅列を通して、そこに思いをくみ取ろうとする想像力。{中略}文字が記号ではなく、言葉に変化したときに生まれるものには、無限の可能性があることを忘れずに、これからも私は本を読み深め、味わっていきたい。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「感情がない「文字」で、なぜ、こんなにも心が動くのか」を問いかけ、主張部分で「想像力」という考え方で答えとしている。最後は自身の今後の行動表明に終わったが、想像することで心が動くという論証に努めている。

#### 12) 優秀『近い未来の日本の姿』

- ・問題設定「町を歩けばいつも多様な人種が歩いていて多様な言語が飛び交っている。多様な人種と共に働き、同じ学校でともに学ぶ。外国から来た人や外国にルーツをもつ仲間ができる。自分がこの状況に置かれることを想像できるか。」
- ・主張部分「文頭に述べた状況は日本でも起こりうる、近い未来の日本の姿かもしれない。果たして私たち日本人は、このような社会の変化を覚悟し、多文化社会を受け入れられるだろうか。」
- ・首尾の呼応「不合」→問題設定で「多様な人種」と働くことを想像できるのかという問いかけから発し、主張部分でも「多文化社会を受け入れられるだろうか」という問いかけで終わっている。問いに対する答えが明確でない。

### (3)中学生意見文作品の検討Ⅱ —第7回小論文グランプリ入賞作品集—京都府教育委員会(2020)

#### 1) 最優秀『題名の力』

- ・問題設定「題名は、いわばその作品の看板で、なくてはならない存在だ。しかし、本当になくなくてはならないものなのか。確かに、世間に出回る作品に題名がないと扱う場面で不便だと思う。でも、それは大勢の人に見てもらうからであって、私たちが書く作文や小論文には必要ないものではないか。当たり前のようにつけられる題名の役割とは、一体なんだろう。」
- ・主張部分「題名は、ただ作品に名前がつけられたものでも、必要な情報を詰めただけのものでもない。題名があることで、作品の良さを引き立て、新たな感動を生み出している。まさに、題名こそ「影の主演」なのだ。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定の「題名の役割」とは何かという問いに対して、主張部分に「題名があることで、作品の良さを引き立て、新たな感動を生み出す」と論じることで、答えと

して呼応させている。

## 2) 最優秀『寝るという教育』

- ・問題設定「「仮眠ができないような会社には来たくない」これはアップルの創業者である、スティーブ・ジョブズの言葉である。睡眠にはたくさんのメリットが存在する。僕たち中高生は成長期であるため、当然大人よりも長い睡眠時間を必要とし、それは大切な時間である。だから、僕たちは、「仮眠ができないような学校には来たくない」と言っても良いのではないだろうか。」
- ・主張部分「睡眠が人間の生活の質を向上させ、良い影響を与えることは明らかだ。これらのことを踏まえて、睡眠の大切さを学び、生活の質を向上させるために、日本全体での睡眠教育が必要である。寝ることの重要性を誰もが知れば、日本全体が自ずと変わっていくだろう。学校は学ぶ場所であるが、その学ぶ質を上げるためにも、仮眠タイムを学校でとることはとても合理的である。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定に置いて「仮眠」の重要性を述べている。学校で仮眠時間を取ることが建設的かどうかの論議はここでは行わないが、主張部分においては、「学ぶ質を上げるためにも、仮眠タイムを学校でとることはとても合理的である。」と論証している。作者の考え得る具体的な問題解決方法の提案を行っているとする。

## 3) 最優秀『無の時間』

- ・問題設定「みなさんは勉強や仕事の合間の「休憩」をどのように過ごしているか。睡眠をとる、テレビを見る、はたまた携帯を使うなど、まさしく十人十色だ。私は入学当初、学活等で学んだように勉強をする時はして、休憩の時には好きなことをしていた。しかし、この夏休みに学んだことは「無の時間」の大切さだ。そのことについてこれからまとめていきたい。」
- ・主張部分「「無の時間」がもたらす効果は大きく、勉強でも仕事でも何か作業をするときに非常に使えるだろう。また、私たちがこれから生きていかなければならないであろう、ストレス社会の中でも「無の時間」は非常に効果的に違いない。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定の箇所において、「無の時間」の大切さを述べることで、「無の時間」が軽視されている現状を問題提起していると取れる。本論では、一見解として形成され、「ストレス社会の中でも「無の時間」は非常に効果的に違いない」と価値づけることで、「無の時間」の大切さを論証している。

## 4) 優秀『見て、聞いて学ぶこと』

- ・問題設定「インターネットに接続しさえすれば実際に現場を見たり、話を聞いたりしなくても、膨大な情報を得られることを意味している。そのような時代を生きる私たちにとって、実際に見て、聞いて学ぶことは必要なのだろうか。」
- ・主張部分「現場に行って実際に見て、話を聞くことは、雰囲気を感じて、記憶に残すことができ、真実を偏りなく学べるという効果を持つことが分かる。したがって私は、実際に見て、聞いて学ぶことは私たちの学びに必要なことだと考える。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では、「実際に見て、聞いて学ぶことは必要」かを問うている。主張部分では「雰囲気を感じて、記憶に残すことができ、真実を偏りなく学べるという効果を持つ」として答えを出している。形式的な答えではあるが、呼応している。

## 5) 優秀『数字の力』

- ・問題設定「数字。それは、〇から九までの数字、又はその羅列によって作られた世界である。数字は、古代から現代まで、多くの数学者たちを虜にしている。では、たった十個の数字の羅列は、どのようにして学者たちを魅了してきたのか。また、数学にはどのような力があるのだろうか。」
- ・主張部分「〇から九まで、十個の数字とその羅列が、可視の影響力、不可視の影響力を以て地球を支え、人間を動かしている。手の内に収まりそうで収まらない、数字の力の偉大さ、神秘さを、少しでも感じてもらえたならば、幸いである。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「たった十個の数字の羅列は、どのようにして学者たちを魅了してきたのか。また、数学にはどのような力があるのだろうか。」と、問いが二つ設けられている。主張部分では「十個の数字とその羅列が、可視の影響力、不可視の影響力を以て地球を支え、人間を動かしている」となる。論証を前提に、読者に自身の見解を承認させる形をとった作品でもある。

## 6) 優秀『自然から学ぶ』

- ・問題設定「私は、国語の時間に絶滅について学習した。絶滅が起こると、生物たちから恩恵を受け取ることができなくなるということを学んだ。生物をヒントにした発明品というものも一つの恩恵と言えないだろうか。そこで、生物の構造、性能をヒントにした発明品について調べてみた。」
- ・主張部分「生物をヒントにして発明されたものはたくさんある。それは、自然を守り、自然を見てきたからこそ発明されたものであるということが分かった。{中略} 自然とうまく共生することが大切である。そのために、自然に目を向け、疑問を持ち、小さな発見を大切にすべきである。」
- ・首尾の呼応「不合」→問題設定では「絶滅」の話から、「生物をヒントにした発明品というのも一つの恩恵」ではないかという問いに発展した。主張部分では、「自然に目を向け、疑問を持ち、小さな発見を大切にすべき」となったが、「絶滅」と「生物をヒントにした発明品」のつながりが明瞭化されなかった。

## 7) 優秀『プログラミング教育の意義について』

- ・問題設定「子ども達に望ましい教育として「コンピューターを受身ではなく、積極的に活用する力」や「プログラミング的思考（論理的思考）」が求められると考えられ、二〇二〇年度から小学校でプログラミング教育が必修となる。しかし、ぼくはこれには反対である。」
- ・主張部分「問題を解決する能力や想像力を小さいころから身につけることこそ予測がつかない未来においても必要不可欠で大切にしていけるべき教育だろう。」
- ・首尾の呼応「不合」→問題設定では、プログラミング教育に「反対」する旨を書き、主張部分では「問題を解決する能力や想像力」が必要だと述べる。が、プログラミング教育によっても「問題を解決する能力や想像力」は養える。論としての納得性が欠け、首尾の首と呼応しづらい。

## 8) 優秀『料理は科学～失敗せずに上手に作るコツ～』

- ・問題設定「私は料理が苦手なこともあり、たまに手伝いをしようと思った時に、迷うことが多々あります。失敗しないで料理を上手く作るにはどうすればいいのでしょうか。」

- ・主張部分「料理を失敗せずに上手に作るコツは、実は素材の持つ特徴を知ることではないでしょうか。そして「あたりまえ」を疑うことから新しい発見があるのかもしれないと思います。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定で「失敗しないで料理を上手く作る」方法について検討する。主張部分では、「素材の持つ特徴を知る」ことと「あたりまえを疑うこと」を挙げ、個人的な経験から一般化を図ろうとしている。

#### 9) 優秀『個性から生まれる美しい術』

- ・問題設定「美術とは何なのだろうか。「美術」とは、「美しい術」と書く。では一体、「美しい術」とは何なのであろうか。」
- ・主張部分「いろんな個性があるから一つ一つ味わうことができる。そうやって味わうことのできるのが、「美術」だ。美しいと思う、「想像」の美しさだと僕は考える。「美術」にはたくさんの可能性が秘められている。僕はこれからもたくさんの“美”に触れてゆきたい。」
- ・首尾の呼応「不合」→問題設定では「1) 美術とは何か」か、2) 「美しい術」とは何か」の二つの問いが立てられる。主張部分では「美術の可能性」について触れられるが、2) の問いである「美しい術」の直接の説明や解には至っていない。

#### 10) 優秀『あな』

- ・問題設定「なぜ顔出しパネルを見ると顔をはめたくなるのかと思い、顔出しパネルについて詳しく調べてみることにしました。」
- ・主張部分「人は知らないうちに「ゲシュタルトの穴理論」によって空いているところを埋めているのだ。{中略} こういった人間の真理を利用することで「ゲシュタルト穴理論」は将来、新しいビジネスチャンスを生み出すかもしれない。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定で「顔出しパネル」などの「空いた穴」に対する興味関心から、主張部分で「ゲシュタルトの穴理論」を引用し、答えとしている。疑問解明型の呼応が見られる。

#### 11) 優秀『あるべき国の姿』

- ・問題設定「お互いの国にはお互いの意見が存在するのだから、両国が歩み寄って解決していけばよい。だが、「相手国が間違っている」と国民に呼びかけ、自国の一致団結により支持を高めようとする国も多い。このように、関係を悪化させることは国同士の関係を築くうえであってもいいことなのだろうか。」
- ・主張部分「国民の意見を広い視野でできるだけ多く客観的に汲み取り、国を正しい方へ引っ張っていく信頼性のあるものであってほしい。そうすれば、両国の問題をお互いの視点で理解し、納得した解決策を出せることが増えるだろう。」
- ・首尾の呼応「不合」→問題設定は「関係を悪化させることは国同士の関係を築くうえであってもいいことなのか」である。主張部分において「あってはいけない」あるいは「あってもいい」と明示的にでも書けていれば呼応しているが、末尾が「～ほしい」や「～だろう」と説得力に欠けた表現が多く、合致しづらい。

#### 12) 優秀『私たちと色』

- ・問題設定「色について考えた時、色は人間と似ているという事に気付く人はどれくらいいるだろうか。」
- ・主張部分「私たちは色をもっと楽しむべきである。目を開ければもう色の世界。一度、そんな風に考えて一日過ごしてみると色の楽しさや美しさが分かってくるだろう。色を大切にし

て、楽しむ。それこそが人間の役割だと私は考える。」

- ・首尾の呼応「不合」→首尾のみを見て考えたい。「色が人間に似ている」という問題設定から、主張部分では「色を楽しむべき」となり、「色を大切に楽しむ」ことが人間の「役割」となっており、首尾の首において「色≒人間」とした定義が「色を「使う」役割＝人間」となり、分離した。

#### (4)中学生意見文作品の検討Ⅲ 一第8回小論文グランプリ入賞作品集—京都府教育委員会(2021)

##### 1) 最優秀『分野をつなげて考える社会のすすめ』

- ・問題設定「私たちが小学校、中学校と習う科目である「社会」。中学校から教科書が三つの分野に分かれる。地理、歴史、公民である。しかし、成績をつけられる際には三つをまとめて「社会」とされる。一見、それほど強い関連はないようにも思えるこの三つの分野は、なぜまとめられているのだろうか。」
- ・主張部分「地理は地域の特色、歴史はそれを活かしてきた記録、公民は地理と歴史から学び、現代の政治を考えていく科目なのだと考えられる。そして、三つの分野を共通の目的のためのものだと捉えれば、つながっている瞬間を必ず見つけられる。{中略}複数人で交流し、地理、歴史、公民のいずれかをつなげて考えること。それが私の考える最もおもしろい「社会」の科目のあり方である。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では、「三つの分野がまとめられている」ことに対して疑問を呈する。問題解決というよりは、解明意欲に基づく論述であるが、結論として、「つなげて考えること」の有意味性から三つの分野がまとまっていると主張し、問題の解明の形となった。

##### 2) 最優秀『美味しい生活』

- ・問題設定「この食べ物、実はシロップのほとんどが同じ味だという。かき氷のシロップのイチゴ味とはそう言われるからイチゴ味とを感じるのだ。では、改めて問いたい。私たちは食べ物の何を食べているのか。」
- ・主張部分「私たちは、日々言葉を食べている。更に付け加えると、私たちは言葉があるからこそ、味にバリエーションを感じることができる。それこそが人間と他の動物の違いであり「美味しさ」を求め続ける人間独自の姿なのだ。{中略}食事という身近な行為について考えることで、毎日をもっと有意義で味わい深いものにしていけないのではないだろうか。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「私たちは食べ物の何を食べているのか」と問い、その答えとして、「私たちは、日々言葉を食べている。更に付け加えると、私たちは言葉があるからこそ、味にバリエーションを感じることができる」という答えで応じつつ、抽象化を進めている。

##### 3) 『さあ、漫才スピーチをしよう』

- ・問題設定「漫才はなぜあんなにおもしろいのだろうか。人から「笑い」を引き出す数分間。この時間に様々なテクニックが散りばめられていると私は考える。その中でも、調和の役割を担う「間」について考えてみた。」
- ・主張部分「この漫才の「間」の分析は、スピーチに生かせそう。人に何かを伝えるという根本は同じだし、スピーチにも漫才のようなエンターテインメント性が必要だからである。「間」を使いこなすことで相手をコントロールし、自分の世界へ引き込む。良いスピーチは効果的な「間」からだ。」

- ・首尾の呼応「合」→問題設定では「漫才はなぜあんなにおもしろいのだろうか」とし、「人から「笑い」を引き出す数分間。この時間に様々なテクニックが散りばめられている」と仮説する。その後、主張部分で「良いスピーチは効果的な「間」からだ」とスピーチでの転用を考えているが、前提として「間があるからおもしろい」という論がある。

#### 4) 優秀『過去に学ぶ』

- ・問題設定「日々、私達が学習している「歴史」という分野。この分野を学習する意味を、どのように考えるだろう。歴史を学習する意味にはとても深いものがある。」
- ・主張部分「私は「過去から教訓を得ること」と「今生きている人の背景を知る」ことが歴史を学習する意味だと考える。{中略}歴史は自分たちが生きていく未来を自分たちが創っていくためにある。私はそう思っている。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定で「歴史を学習する意味」は「深い」として仮説する。主張部分では二つの意味があることを述べ、呼応させている。シンプルな対応であるが、呼応の一つである。

#### 5) 優秀『自分らしい未来のために』

- ・問題設定「求めた答えが正確かどうかは確かに重要だ。しかし、本当に大切なことはその結果にたどりつくまでの過程であり、過程こそ結果以上の意味があるのではないだろうか。」
- ・主張部分「過程とは今までに自分が決めてきた選択と意志であり、「自分」を形作っているものであると考える。{中略}どんなときでも、選択には必ず、自分の意志が存在している。その小さな意志から大切にしておくことが、自分だけの過程、結果に近づく一歩になるのだ。」
- ・首尾の呼応「不合」→問題設定で「過程こそ結果以上の意味がある」という箇所注目する。主張部分では、「小さな意志を大切にすることが、自分だけの過程、結果に近づく一歩」としたことで「結果」が「過程」以上の意味を持つこととなっている。

#### 6) 優秀『孔子に学ぶ生き方』

- ・問題設定「中国古代の思想家・孔子の言葉を構成に残そうと編まれた「論語」は、二千五百年以上も前のものだ。なぜそんな昔のものが現代にまで伝えられ、そして孔子を知らずとも身近に四字熟語として知られているのだろうか。」
- ・主張部分「論語は、いつの時代でも私たちの生活の道標となる。だからこそ、読み継がれてきたのではないのだろうか。そんな先人の言葉を、私は後世にもつないでいきたいと強く思う。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定で孔子の「論語」に着目し、主張部分で「いつの時代でも私たちの生活の道標」となることで価値づけを行っている。問いと答えの一体化がなされている。

#### 7) 優秀『子どもは遊んで育つ』

- ・問題設定「「遊んでばかりいないで、勉強しなさい。」という言葉は遊びよりも勉強が優先される近年の傾向をよく表している。しかし、一昔前は「子どもは遊ぶことが仕事だ。」という考え方の中で、自分の気持ちを伝えたり、相手の気持ちを理解したりという社会性を養ってきたように思う。」
- ・主張部分「中学生として、まずは「地域遊び」に参加しよう。そして大人になったら、「子どもの遊び」を大切に、子どもが遊べる場を守っていきたい。」
- ・首尾の呼応「合」→やや問題設定が不明瞭ではあるが、「遊ぶ」ことの重要性に着目し、主張

部分において「地域遊び」という具体的な手法を挙げ、未来の自身の行動証明を行っている。

#### 8) 優秀『想像から広がる視野』

- ・問題設定「一つの考えにとらわれてしまって他のアイデアが思いつかないということはないだろうか。私は、色々な視点から物事を考え想像することで新しい考えが生まれると思う。」
- ・主張部分「絵を見る楽しさは、絵そのものの美しさに感動できるものである {中略} 絵は発想を豊かにしてくれる。絵をアイデアを。そして想像を。そうすると様々なものが見えてくるのだ。」
- ・首尾の呼応「不合」→丁寧な論述ではあるが、根幹の「新しい考えが生まれる」ことについて具体的な説明に欠ける。「絵」と「アイデア」の関連付けを自身の言葉でもって論じる必要がある。

#### 9) 優秀『季節があること』

- ・問題設定「日本には春、夏、秋、冬の四つの季節がある。四季は私たちにどんな影響を与えてくれているのだろうか。」
- ・主張部分「季節を感じ、その季節の食べ物を食べたり自然に触れたりみたりしてはどうだろう。 {中略} 心をいやし、日々を楽しみをもたらず「季節」を今まで以上に感じてほしい。」
- ・首尾の呼応「合」→四季が人間の五感を刺激することを論述している。主張部分では、展開部分の内容を抽象化したことでこの作品自体の主張の特色が薄れたが、対応はしている。

#### 10) 優秀『自由に広がる学びの形』

- ・問題設定「世の中に着々と進出する AI。それによって、働き方も変化する。これまで以上に、自由に、自分たちで考え決められる可能性が広がっていくのではないだろうか。」
- ・主張部分「自分自身が興味を持ち見つけた答えを伝えることで、自分も相手も、理解が深まったり視野が広がったりする。 {中略} 私たちはもっと自由に学び、仲間と共に考え、深い学びを積み重ねるべきだ。」
- ・首尾の呼応「合」→AIに関する事柄を切り口に、問題設定を行っている。実際の授業を例に挙げ、主張部分で「自分自身が興味を持ち見つけた答えを伝える」ことの重要性を述べている。

#### 11) 優秀『効果的なサボり』

- ・問題設定「「サボる」とは嫌なことや面倒なことから逃げるということに等しいのだから、ついサボりたくなることは人間として普通だと思う。では、サボることには何かしらの効果があったりしないか。」
- ・主張部分「サボりはサボりでも効率よくサボることで、逆にサボらずやるより集中できることもあると今回学んだ。 {中略} いつも以上に集中できるように、効率のよいサボりを少しずつ取り入れてモチベーションを上げていきたい。みなさんにも「効果的なサボり」ぜひ試していただきたい。」
- ・首尾の呼応「合」→問題設定の「サボる」ことの効果は何かという問いに対して、主張部分で「効率よくサボる」という論全体の主張をうまくまとめて書けている。

#### 12) 優秀『「あたりまえ」の力』

- ・問題設定「新型コロナウイルスによる休校。私は、そんな「あたりまえ」が失われた状況だからこそ、その中で「あたりまえ」の大切さについて学んだ。」
- ・主張部分「日々の生活の中にある「あたりまえ」が及ぼす力は大きく、生活を支えてくれる

ものとなる。{中略}「あたりまえ」は、私達を支えているすごいパワーを持つ、いわば縁の下の力持ちだ。」

- ・首尾の呼応「合」→問題設定で「あたりまえ」に着目し、主張部分では「あたりまえ」の力を「生活」と結び付けている。コロナ禍での作者の感覚を客観的に述べられている。

#### (5)総括

36編の最優秀、優秀作品入選作品のテーマは、きわめて多様であり、いわゆる真面目な中学生らしいとか、大人が喜びそうとか、思いつきがちであるとかのものが少なく、オリジナルというべきテーマを選び、問題を設定していた。ということは、それぞれの作品ごとに「問い」が設定され、問題解決過程が展開され、答えが導かれるということである。

その「問題設定」と「主張部分」の関係、「首尾の呼応」（問いと答えの整合性）を検討することで、筆者である中学生の意見文における問題解決過程の質を解明することができる。分析の結果は、以下のとおりである。

- ・「合」25編
- ・「不合」11編

入賞作品の内容は充実しており、論理の質も高い。にもかかわらず、このように「不合」と判定された比率は30.6%ということは、筆者（中学生）の首尾の呼応、問いと答えの整合性の意識が弱いということを示している。まさに画竜点睛を欠く結果が三分の一近くに至ろうとしている。この部分に関する指導の希薄さがうかがわれる事実と思われる。

## 4. 結論

### (1)首尾の呼応の不整合が意味すること

首尾の呼応を見ることで、学習者がどこに向かって書き終えればよいのか、というゴールを示すことになる。比喩的に書くことを走ることで例えるならば、短距離走はもちろんのこと、長距離走として遠くを走ってゆくとしても、ゴールがあるからこそ人は走ってゆけるし、ゴールが明確になればなるほど、それが自身の筆の「駆動力」にもつながってゆくだろう。とすると、どこがゴールかを明確に意識せずに走った姿が入賞作品に現れたということができる。しかも、どの作品も論理展開、文体に関する一定の水準を有していると考えられるので、どこへ向けて走るかの意識は弱かったが、正しく、快調に走った事実は示されているのである。このゴールと過程の不整合の状態が意見文の表現学習の実態の大きな特徴の一つを提示している。このことから指導のあり方、文章作成の意識の形成、目的意識などが学習指導のポイント、今後の研究課題として浮かび上がってくる。

### (2)先行研究との照合

先行する理論面の分析においても、意見文作成におけるゴールと過程の不整合の要因となる事実が見て取れた。大西道雄の優れた先行研究と整理が存在するにもかかわらず、それを実践に活かそうとする理論研究者の姿勢は弱いものであるといえる。先行研究、あるいは提案をき

ちんと受けて、実践して検証して次の実践の向上を目指すという PDCA 的なサイクルは見受けられなかった。これが実践面の弱さを惹起する要因となっていることは容易に推測できる。

### (3)本研究の最終的な位置づけと今後の研究課題

今回「首尾の呼応」から「結論」及び「終わり方」に焦点化した研究を行った。中学生の意見文を成立させる条件に関して「首尾の呼応」の重要性を確認することができた。この全体像ではなく、一部分の重点化による学習指導の方法も一つの大きな実践提案になると考えられる。

今後、この方法を実践において活用し、検証していくことを次の研究段階としたい。

#### \* 本文の執筆分担

「1. 問題の背景」「2. 1980 年前後から現在までの「意見文」の定義の概観」は、植山俊宏が執筆した。

「3. 中学生意見文作品の検討」は、小野田磨柚が執筆した。

「4. 結論」は、植山俊宏、小野田磨柚の両者が共同で執筆した。

#### 【引用文献】

大西道雄（1989）『意見文指導の研究』溪水社，pp.17-18，

大西道雄（1997）『作文教育における創構指導の研究』溪水社，pp.224-225

大西道雄（2018）「意見文，作文指導」田近洵一・井上尚美・中村和弘編『国語教育指導用語辞典第五版』教育出版，p.152

京都府教育委員会（2019）『第 6 回小論文グランプリ入賞作品集』

京都府教育委員会（2020）『第 7 回小論文グランプリ入賞作品集』

京都府教育委員会（2021）『第 8 回小論文グランプリ入賞作品集』

佐渡島紗織（2019）「書くことの指導方法 1）実用文・論説文の指導」全国大学国語教育学会編『新たな時代の学びを創る中学校・高等学校国語科教育研究』東洋館出版社，pp.170-172

中西淳（2010）「意見文の学習指導の方法」『新たな時代を拓く中学校・高等学校国語科教育研究』学芸図書，pp.71-72

藤井治（1984）「感想・意見」田近洵一・井上尚美編『国語教育指導用語辞典』教育出版，p.134

巳野欣一（1988）「意見文（作文）」国語教育研究所編『国語教育研究大辞典』明治図書，p.43

森田信義（1981）「意見文」野地潤家編『国語科重要用語 300 の基礎知識』明治図書，p.184

森田信義（2009）「中学校・高等学校／説明文・評論等」全国大学国語教育学会編『国語科教育実践・研究必携』学芸図書，p.116